第545号
令和８年
7月20日

すまいるたうん

発行元
東京新聞
南千住専売店
TEL3803-1781
発行責任者
鬼塚　佳代子
TEL090-2657-0300

想い出が動き出す場所 ― 『三ノ輪新開地』を手にした人々の記憶

「写真から動き出す記憶。あなたの想い出はどこから始まりますか」

本書『三ノ輪新開地―語り部の記憶』が東京新聞に紹介されて以来、横浜、宇都宮など、かつてこの地で暮らしていた方々から多くのお申込みが届きました。遠方から直接お店に足を運ばれる方も少なくありません。

川崎から1時間半かけて来られた昭和24年生まれの男性は、卒業した瑞光小学校や南千住第一中学校の周辺を歩き、建物も道路もすっかり姿を変えた街並みに驚きを隠せなかったと話されました。

本を手にした皆さんは、写真をきっかけに当時の記憶がふっと立ち上がるようで、笑顔で思い出話を語ってくださいます。

三ノ輪銀座、映画館、へび屋、イトーヨーカ堂…。年代によって、心に残る場所は少しずつ違います。ここでは寄せられた声の一部をご紹介します。

◆東京スタジアム（東京球場）の記憶

「球場の地下にボーリング場とビリヤード場がありました。ボーリングは大流行で、平日でも2時間待ち。待ち時間にビリヤードをしていました。地下に施設を作ったため水はけが悪く、試合が中止になることも度々ありました」南千住1丁目で理髪店を営む 風見好昭さん（昭和21年生まれ）

「道灌山の坂の上から球場の光が見えた」

バスで西日暮里から来られた男性

「ヒットが出るとファンファーレが鳴った」

90代男性

「集団就職で東京に来て、友人と観戦に行くのが楽しみでした」越谷から来られた男性

「冬はスケート場になっていて滑っていました。」女性

◆へび屋の記憶

「昭和10年頃の新開地の地図には、漢方薬やマムシを使った精力剤を扱う『へび屋』が載っています。私の記憶にあるのは日光街道沿いの店で、ショーウィンドーには青大将などの蛇が絡み合うように展示されていました。蛇の頭を挟んで皮を剥ぎ、血を絞って小さなグラスに注ぎ、シロップとともに滋養強壮剤として販売していました。身体の弱かった友人が飲んでいました。店内にはサイの角や燻された猿の頭も並び、独特の雰囲気がありました。都電の共同便所に蛇が入り込み、大騒ぎになったことも記憶に残っています」

宇田川誠寿さんの記憶より

「日光街道の『蛇屋』の前をよく通り、生き血を絞っているのを隠れて見ていました。子ども心に残酷で気味悪く感じました」

「学校帰りに友だちとウィンドウ越しに見えるヘビをついていました」

◆新開地は“特別な日”の場所だった

「我が家では、父の給料日やボーナス支給日の“特別な日”に行く場所でした。普段買えない物を買ってもらえる小さな希望の持てる日。そんな夢のある場所でした」

さいたま市　77歳男性

◆写真がつなぐ同じ時代の記憶

「団塊の世代ですが、掲載されている写真を見ながら自分の子ども時代や故郷の風景を思い出し、家族とも思い出話をしながら楽しく読ませていただきました。写真そのものは違っても、同じ時代を生きた者として共感できる情景ばかりでした」千葉県男性

「花嫁さんの近所廻りは、家で支度してやったとリハビリデイで話題になりました」品川区　80代女性

『三ノ輪新開地―語り部の記憶』は区内の図書館にも置かれています。

写真とともに、皆さんのふるさとの記憶をひも解いてみませんか。

三の輪新開地　―語り部の記憶―
定価1400円（税込み）
販売場所　縁処　三ノ輪新開地
ジョイフル三の輪商店街
お問合せ090（2657）0300　　鬼塚